

七生中学校の誕生

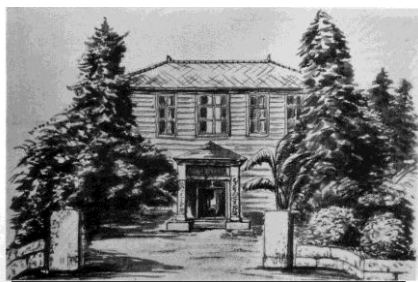
戦後の教育は大きく変革し日野市域の学校も大きく変わりました。戦前までは明治初期から続いた小学校の日野・潤徳・平山の尋常高等小学校（尋常科6年、高等科2年）の3校と日野小学校の分校である豊田分校と下田分校、潤徳小学校の分校である落川分校の3分校がありました。この小学校は戦時中の昭和16年（1941）には国民学校と改称されました。国民こぞっての体制が教育の場にも注がれていきました。

しかし昭和20年、終戦になり教育体制は大きく変革をとげました。尋常高等小学校は小学校と改称されました。そして新たに新制中学校が発足したのです。6・3制の教育制度の施行で、今日の小学校6年、中学校3年の義務教育の体制が始まりました。

新たに誕生した新制中学校は、日野市域では日野町立日野中学校と七生村立七生中学校の2校でした。昭和22年のことです。戦後の混乱が収まらぬ中での改変は、校舎の建設はもとより、教材や予算の確保も大変であったと言われています。戦前の教材は禁止になり、社会科の教科はなく、他教科の教科書はザラ紙で配給され、また一冊の教科書が共同で使用されていました。

日野中学校は校舎ができるまでの間、日野小学校の校舎に同居し、教室を分け合いながら二部・三部授業の体制で授業が開始されました。

一方、七生中学校は七生村役場の庁舎（現在の南平1-35付近）を校舎として発足しました。この間、役場は高幡の金剛寺本堂に移り業務を行っていました。教室数は



発足時の七生中学校校舎
（七生村役場）（昭和22年）



新校舎整地作業をする生徒（昭和23年）

少なく、二部授業を行い午前、午後の通学となりました。運動場もなく潤徳小学校の校庭を利用して運動会なども開催しておりました。

新校舎は、昭和23年2月15日に現七生中学校の所在地（南平6-7-1）に敷地が決定し、地鎮祭が行われました。5月7日には上棟式を迎え、夏休み明けの9月4日に新校舎が落成し授業が開始されました。建設敷地は雑木林の荒地で、校域整地のため村人の懸命な勤労奉仕が行われました。また、生徒も授業の合間や夏休みなどに整地作業に参加し、開校を目指したのです。こうして七生中学校は昭和23年9月に完成し、新校舎での授業が始まりました。当時南多摩郡17町村の17新制中学の中にあつて、七生中学校は他校に先がけて新校舎の建設ができたと言われている。当時の地域住民の教育に対する熱



七生中学校校舎
(昭和 30 年頃)



自転車通学の生徒
(昭和 34 年頃)



七生中旧校舎と生徒
(昭和 34 年)



七生中南側七生丘陵風景
(昭和 34 年)



上写真 昭和 34 年
南平駅から七生中通学路
下写真 平成 12 年
同位置の通学路の風景

い思いが伝わってきます。

七生中学校の学区は七生村（百草、落川、三沢、高幡、程久保、南平、平山の7村が明治22年に合併）の全地域という広範囲でした。通学距離は長く、多くの生徒は自転車通学をしていました。昭和32年度の地区別通学生徒数は百草（28）、落川（40）、三沢（52）、程久保（20）、高幡（71）、南平（61）、平山（104）、大和田（23）、鉄道官舎（22）、その他（10）、合計431名という生徒数の記録

があります。また当時の1クラスの人気は50名前後であり、教室内の机や椅子は密接し、教室の狭さがひときわ感じられる教室でもありました。

当時の七生村は農村地帯であり、人口密度の少ない村でもありました（昭和33年の七生村人口7,147人、『七生村史』より）。校域の近くには住宅はなく、浅川堤南側から水田が続き、七生丘陵まで緑と水の自然環境に囲まれた地区でした。中学校の年間計画では、農作業の多忙な春と秋には農繁期短縮授業（4時間）が4月と11月に一週間行われていました。学校、生徒、家族ともども農作業に従事し地区の人々、家族の強い絆が感じられたものです。

その後、戦後の日本の経済発展にともない社会は大きく変わり日野市の人口も昭和40年代から急増し、学校数も増加しました。昭和22年の人口22,944人に比べて、昭和45年には人口98,557人(国勢調査参照)に急増しました。児童・生徒数も増加し、市立小学校は

3校から最も多かった1990年代には20校、市立中学校は2校から8校に増加しました。新たに新設された中学校8校の創立年は次の通りです

昭和22年 日野中学校（日野第一中学校 昭和29年に改称）

昭和22年 七生中学校

昭和29年 日野第二中学校
昭和45年 日野第三中学校
昭和48年 日野第四中学校
昭和52年 三沢中学校
昭和55年 大坂上中学校
昭和56年 平山中学校

この様に戦後の学校教育は大きな変遷を遂げ今日に至っています。この歩みを振り返り、当時の方々の教育に対する強い熱意、尽力、貢献があって今日の学校があることも忘れてはならないと思います。この教育の原点を見つめなおし、21世紀これからの学校教育の進展を目指す原点とすることが大切と考えます。日野市域の地域住民、教職員、生徒の当時の思いを伝承し、これからの日野の教育の進展に繋げたいものです。

(日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員 清水守男)

◎これは「広報ひの」平成25年6月15日号に掲載された記事の詳細版です。資料館で印刷したのも配布しています。

(問) 日野市郷土資料館 (Tel 042-592-0981)